

昭和詩人論

日本現代詩研究者国際ネットワーク編

有精堂

昭和詩人論

日本現代詩研究者国際ネットワーク編

有精堂

書名 昭和詩人論

コード ISBN4-640-31049-8 C3092

発行日 1994年4月25日

編者 日本現代詩研究者国際ネットワーク(MJPS)
事務局 〒343 越谷市南荻島3337
文教大学文学部石原研究室
電話 0489(74)8811(代)

発行者 山崎 誠

発行所 有精堂出版株式会社
〒101 東京都千代田区神田神保町1-39
電話 03(3291)1521(編) 1522(営) 1523(総・経)
FAX 03(3291)1528/振替00190-2-40684

Printed in Japan (フォレスト/関口製本)

序 文

小 海 永 二

「日本現代詩研究者国際ネットワーク」(MJPS、以下「ネットワーク」と略称)は、一九九二年四月二十五日に
結成された。

序 文
むろんそれ以前の準備段階があつた。この種の研究者間のネットワークの必要性をわたしを感じ始めたのは数年
前に遡るが、すぐには身辺の事情が許さず、ようやくその機が熟したのは、一九九〇年の末頃であつた。その頃わ
たしは、スイス・チューリッヒ大学の日本文学研究者である旧知のエドワード・クロツペンシュタイン教授への私
信の中でこの計画を伝え、賛同の返事をもらったのをおぼえている。

一九九一年に入ってからわたしはこの計画とその大凡の構想とを英米文学者・詩人の文教大学教授石原武氏と、
アイルランド文学者で詩人の東海大学教授相沢史郎氏とに打ち明け、まず三人で設立準備委員会を発足させた。こ
の時、石原氏が近・現代詩研究におけるアカデミズムの復権をこの「ネットワーク」に期待する旨述べたのを、わ
たしは強く記憶し、氏の考えを胸中深く刻みこんだ。

石原氏は、先輩の英・米文学者で国際的な知名度を持つ詩人の福田陸太郎氏に協力を仰ぐことを提案し、福田氏
の積極的な協力を取りつけた。また石原氏は会則案の作成にとりかかり、その原案を三人で検討して成案を得た。

他方、相沢氏は、岩手県北上市に設立されて間もない日本詩歌文学館の運営に深くかかわる立場から、館との協

力関係を結ぶために尽力し、「ネットワーク」の〈資料収集センター〉を日本詩歌文学館に置くことの了承を館側から得ることができた。

わたしの意中には、「ネットワーク」の構想に関して、海外の研究者との連携のみならず、国内における日本人研究者相互の一体的な結びつきをもこの機会に同時に実現させたいとの願いがあった。四季学会のような個別的研究対象を持つ研究者の団体はすでに存在し活動していたが、日本近・現代詩の総合的な研究を志す団体は未だ存在せず、国内の研究・教育機関に在籍する日本近・現代詩の専門研究者の数は必ずしも多くない。もし国内の研究者と国外の研究者とを大きく一つに結びつけることが可能であれば、そのメリットは測り知れないとわたしは思った。

とりわけ、国内外を問わずこの分野での若手の研究者の参加を求め、その育成をはかることが将来のために重要であろうと考え、石原・相沢両氏の賛意を得て、帝京大学非常勤講師の詩人国中治氏にこの計画の重要な推進メンバーのひとりとして加わってもらうことにした。

これらのメンバーによる数度の会合を経てほぼ準備作業が終った段階で、呼びかけるべき国内外の研究者のリストアップにとりかかった。海外の研究者の人選には、それ迄の国際的な交友関係を生かしてわたしと石原・相沢の両氏があたり、国内の研究者の人選には、わたしと国中氏とがあたつた。特に国中氏には、将来の可能性をも含めて有力な若手研究者の名前をあげてもらった。わたしの作成した原案を国中氏が修正・加筆した次のような「設立趣意書」を会則案および入会申込書を同封して、日本人研究者約三十名、外国人研究者約二十名に発送したのは、一九九一年十月のことであった。

日本現代詩研究者国際ネットワーク設立趣意書

近年、アジア、欧米など世界各国で、日本の近・現代詩への関心が顕著に見られるようになり、ご承知のように、海外の日本文学研究者で日本の近・現代詩を専門に研究しようとする方々が輩出しつつあります。これは、私ども日本人の専門研究者にとって大いに歓迎すべき傾向です。しかし、一方、肝心の日本における近・現代詩研究は、専門領域の細分化、およびアカデミズムと詩壇との乖離が進行した結果、各研究者間、各研究対象領域間の関係が見えにくくなり、日本の近・現代詩を総体として提示することが困難な状況に立ち至っていると思われまます。

そこで、私どもは、各国間の協力態勢の下に、日本の近・現代詩をさらに広く海外に紹介し、国際的視野において位置づける中で、研究の活性化を促すことを目的として本ネットワークの設立を計画しました。

また、従来私どもは個々に海外の研究者たちと接触を持ち、日本国内での研究の便宜をはかるなどの協力を行ってきましたが、こうした個人的な努力には限界があり、今や国際的な研究組織を設けるべき段階にきているように思われます。したがって、本ネットワークでは、海外研究者の要望に応じて研究上のさまざまな便宜を提供しつつ、相互に情報交換や研究交流を行っていきたくとも考えています。研究内容の性格上、本部は日本国内におき、原則として日本語を基準言語といたします。

右の趣旨をご理解の上、積極的な参加をお待ち申し上げます。

なお、同様の研究者をご存知でしたら、参加をお誘い頂けると幸いです。

一九九一年十月一日

設立準備委員会

相沢史郎（東海大学）

石原 武（文教大学）

研究者各位

小海永二（横浜国立大学）

結果は予期した以上に好調で、日本人研究者二十六名、外国人研究者十四名の計四十名の参加がまず実現し、海外研究者の国籍は、韓国、中国、台湾、アメリカ、スイス、ドイツ、オーストラリア、メキシコ、ポーランド等にわたった。発足時の会員数としては、まずまずのところであろう。その後、会員数の増減があり、現在の会員数は四十七名に達している。

以上のような経過を経て冒頭に記したように一九九二年四月二十五日、東京の東海大学代々木校舎で設立総会が開かれ、規約および運営に関する事項が協議・決定された後、わたしの「日本現代詩研究者国際ネットワーク設立の趣旨」、福田陸太郎氏の「日本現代詩と外国」と題する講演が行なわれ、「ネットワーク」が正式に発足することになった。

なお、当日の集会は、「東京新聞」五月六日づけ夕刊の紙面に次のように報じられた。

日本現代詩研究者国際ネットワーク設立

日本の近・現代詩の海外への紹介と研究の活性化を目指した「日本現代詩研究者国際ネットワーク」の設立総会がこのほど、東京都渋谷区の東海大学代々木校舎で開かれた。

総会には趣旨に賛同した会員四十人（日本人二十六人、外国人十四人）のうち約二十人が参加。会員を研究者に限ることを定めた規約や、会報・紀要の発行、研究学会の開催などの事業計画を決めたあと、代表に小海永二氏（横浜国大教授、日本現代詩人会長）を選出した。

あいさつの中で小海代表は、海外で日本の近・現代詩に対する関心が高まり、個人レベルでは海外の研究者の要望に対応しきれなくなってきたこと、国内でも近・現代詩を総体として扱う学会がないこと、などネットワーク設立の趣旨を説明し、「当面は任意団体だが、将来は国際学会にしたい」と抱負を語った。

続いて、顧問の福田陸太郎氏（英米文学者）が記念講演。これまで日本の近・現代詩がどのように外国に紹介されてきたかを解説したあと、「個人詩集に比べてアンソロジー形式の翻訳が少なく、出ても長続きしない。日本の現代詩の翻訳が増えれば、ノーベル賞の受賞者も増えるでしょう」と会員を励ました。

本「ネットワーク」のその後の活動状況については、事務局作成による巻末の「MJPS活動状況」にゆずり、以下簡単に本書の刊行に至るまでの経緯について述べる。

本書は「ネットワーク」の二年度目の主要な活動の一つとして、一九九三年度総会（同年五月十六日、於奈良大学）の席上で発行が正式に決定されたものであり、総会で選出された、わたしの他安藤靖彦、和田博文、中村不二夫、石原武（事務局）の五氏の編集委員が協議して、六月中に会員への執筆意向調査を行ない、その結果に基づいて内容の決定を見るに至った。

途中、特定の研究テーマを立てた上で、多様な角度からそのテーマの解明に至れるよう、立体的な構成案も検討されたが、「ネットワーク」は設立されたばかりの組織であり、会員研究者の執筆しやすさを考慮して、一冊の研究書として一定のテーマ性を持ちつつその範囲内で比較的自由に個々の研究者に執筆対象を選んでもらえるような構成案を作ることにし、今回は「昭和詩人論集」という体裁を取ることにした。もし発行書肆の協力によって継続刊行が可能になれば、来年度はまた別の新しい編集方式による研究論文集の刊行も考えられるだろう。

わたしの見るところ、日本近・現代詩（もしくは詩人）に関する論稿そのものは、質を問わねば世に少なくない。

詩人、評論家によるその種の文章、評論・エッセーの類は、いわゆる詩誌に掲載・発表されるものも含めて、点数少なからずある。とすれば、研究者による専門論文の存在価値はどのあたりにあると言えるだろう。ここで、本来あるべきアカデミズムの存在意義が問われることになる。

安易な主観的感想や底の浅い着想を排除し、客観的な実証性（それが学問の基礎であろう）をふまえた正確・緻密な論証過程そのものが読者の知的関心を刺戟しうるとすれば、加えて、地道な調査による新しい発見や新鮮な発想による評価角度の提示や説得力ある詩史的位づけなどがあり、さらにはまたそれが文体的な魅力をも合わせ伴うとすれば、そのようなものこそ恐らく、地味ではあっても専門研究者による論文の存在価値と言いうるだろう。本書に掲載された論稿のすべてがそれだけの価値を持つかどうかは、読者の判断に俟たねばならない。しかしながら、目ざすところは明らかで、本書に収録された各論文が、いわゆる評論やエッセーとは異なる存在意義を持つことを共通の課題としてになっていることは確かであろう。この課題は難題である。だが、これらを理想に向けての第一歩とすれば、相互研鑽のための組織でもある「ネットワーク」が世に問う最初の論文集として、少なくとも問題提出の役割を果たしたことになるに違いない。

（一九九三年十一月）

昭和詩人論
目次

序 文

安藤一郎論

▼内なる人間、詩人、批評家

伊東静雄論

▼「子規の俳論」当時

大江満雄の第三詩集『海峡』の世界

小野十三郎論

▼〈短歌否定〉の遠心力

北川冬彦論

草野心平論

▼〈円・螺旋運動〉のイメージを中心にして

小海永二 1

星野 徹 13

角田敏郎 29

森田 進 38

橋浦洋志 53

福田陸太郎 70

大矢祐嗣 89

高橋新吉 分裂のメルヘン

▼詩集「祇園祭」論

平居 謙

109

立原道造と永遠なるもの

▼初期詩篇から十四行詩への位相

錦織 政晴

125

西脇順三郎の基礎的研究

▼国際的波動と方法的特質

千葉 宣一

141

春山行夫の詩の構成

▼『植物の断面』中の「一年」を中心に

國 中 治

158

落下のイメージ・菱山修三論

▼『懸崖』から『荒地』へ

宮崎 真素美

173

SHIP OF REASON

▼The Poetry of Maruyama Kaoru

Robert C. Edd

204

理性の船

▼丸山薫の詩

ロバート・エッジ
訳・相沢 史郎

205

村野四郎論

金光林

225

山之口貌の位置

米倉巖

243

▼第一詩集『思弁の苑』を中心に

執筆者紹介

SUMMARY (英文)

付録

日本現代詩研究者国際ネットワーク(MJPS)活動状況
会員名簿

昭和詩人論

安藤一郎論

▼内なる人間、詩人、批評家

星野徹

『安藤一郎全詩集』（一九九一年、思潮社）には、九冊の単行詩集が発行年順に収められている。列举すれば、『思想以前』（一九三〇年、詩人社）、『静かなる炎』（一九四三年、湯川弘文堂）、『ポジション』（一九五一年、外国文化社）、『愛について』（一九五五年、国文社）、『経験』（一九五八年、昭森社）、『遠い旅』（一九六二年、思潮社）、『ひらいた掌』（一九六三年、昭森社）、『夢のあいだ』（一九六七年、思潮社）、『磨滅』（一九七三年、思潮社）。これらの詩集を、わたしは改めて逆年順に『磨滅』から『思想以前』へと、感銘を受けた作品やパートにはしるしを付けながら読んでいった。死によって中断されたとは言え、『磨滅』を一応の到達点と見て、そこまでの発展過程が、あるいはその過程の鍵となるものが、そうすることで読み取れはしないかと思っただけである。が、一読しただけではさまざまな印象が飛び跳ねるだけで、予期したものは容易に見えてこない。そこでこんどは初期から後期へと、しるしを付けた作品やパートには念を入れて、読み返していった。全作品の上を往復し終えたとき、特に豊かな表情をまとうってわたしの方へと歩み寄ってきた作品はこういうものであった。「ロダンの『考へる人』^{ル・ペンヌール}によせる」「ある心の風景」（『思想以前』）、「鳩——中華国民に與ふ」「稲妻」（『静かなる炎』）、「ポジション22」「ポジション32——車輪の夢」（『ポジション』）、「若い薔薇たち」「愛についてI」「レントゲンの街」（『愛について』）、「経験3——ぼくのカスバ」「経験

17「経験22」（『経験』）、「一個の幽霊」「島」「鞘のごときもの」（『遠い旅』）、「ホレーシオへの別辞」（『ひらいた掌』）、「夢のあいだ19・島々について」「夢のあいだ22・影の王国について」（『夢のあいだ』）、「外科病院」「吊り橋」（『磨滅』）。

これらの作品を思い浮かべながら、詩集から詩集への変化を併せ考えるとき、『ポジション』から『愛について』にかけてが第一のピークを形成し、『夢のあいだ』から『磨滅』にかけては第二のピークに差しかかっているように見える。そうすると、『思想以前』と『静かなる炎』は第一のピークのための準備の段階、『経験』『遠い旅』『ひらいた掌』は第二のピークのための同じく準備期間であることになる。この変化、もしくは発展の鍵になるような作品を求めて、先の詩篇群をもう一度見直すとき、先ず立ちあがってきたのは「ホレーシオへの別辞」で、これを無視するわけにはゆかない。

きみが ぼくの周囲で

あわれな若い王子がまきこまれる 馬鹿げたドラマの

幾場面かを じっと見守ってくれたのは

ぼくには うれしいことに違いないが……

ときには 堪えがたい苦痛だった

いや 一つの屈辱にさえ思われたのだ

この世で 信頼できる者は

ホレーシオ

ただ きみ一人だけ